移行対象に関する理論的考察

――特にその発現の機序をめぐって――

教育心理学研究室　遠　藤　利　彦

A Theoretical Examination into the Concept of Transitional Object

――especially centering around transitional object origins――

Toshihiko Endoh

The term "transitional object" was first used by Winnicott(1953) to refer to inanimate objects, e.g. a soft toy or blanket, often specially used to provide comfort or solace in infancy and early childhood. A number of psychoanalysts and empirical researchers have followed Winnicott, and today it is generally accepted that infant's attachment to a transitional object is universal on the basis of the "good-enough" relationship of mother and infant, and that its absence or misuse is associated with psychopathy, later cognitive or character disorders. Nevertheless there appear to be some logical fallacies in this conceptualization and important unanswered questions about the origin and meaning of transitional objects, which need further consideration. In this paper, a theoretical contradiction of Winnicott's thesis is pointed out and an alternative interpretation of the origin and meaning of transitional objects is submitted.

I　移行対象とは何か。

乳幼児を観察していると，時に，ある不思議にとりつかれることがある。それは，多くの場合，子どもの眼が重く閉じられようとする時に，認めることができる。タオルケットの端を丸めて，鼻と口の周りを刺激しながら，絶えず口をクチュクチュ鳴らしている子。口には親指，手には毛布と，漫画スヌーピーのライナスさながらの様子を見せる子。多くの子どもが，それぞれにその子なりの"儀式"を有していることには驚かされる。しかし，私達はこれまで，その儀式があまりに日常的なものであるがゆえに，かえってその心理学的事象としての意味を過小視し，不当にも不問に付したままにしてきたのかも知れない。

私達の視線を，子どものそうした現象に注がせ，初めて，その深遠なる意味の一端を開示してくれたのは，英国の小児科医であり，精神分析医でもあったD. W. Winnicott[1]であった。彼は，乳幼児が特定の対象（毛布，タオル等の布類あるいは人形やぬいぐるみ等）に特別の愛着を寄せる現象を，移行対象(transitional object)の術語をもって概念化し，それが子どもの情緒発達過程にポジティヴな意味を有することを明らかにした。それは，特に子にとってのストレスフルな状況，即ち母親の不在，就眠時，旅行時，あるいは未知の人間，慣れない環境との遭遇，接触等の状況で乳房または母親自身を象徴的に代理し，子の分離不安，抑うつ不安を癒し，子を落ち着かせ，慰めるもの（soother）として機能するのだと言う。この移行対象の機能に関しては，その後の殆どの学者の見解が一致していると見てよいだろう。実証的な見地からこのことを明らかにした研究の一部を見ておくとすれば，Korner 他（1972）[2]，Gay 他（1976）[3]などは，複数の子どもの観察結果から，移行対象が，子が特に緊張やストレスを経験した後に用いられやすいということを見出し，その慰めの機能，不安や恐れに対する防衛の働きを確認している。また，Mahalski（1983）[4]は，移行対象が覚醒と入眠の間の橋渡しをするという点で特に，子にとって極めて重要な役割を担っているのではないかと考察している。さらに，Passman(1975, 81)[5][6]の一連の実験研究は移行対象存在（実験では毛布）の条件下で，有意に，子の不安，困惑の度が小さくなり，遊び

や探索行動，学習といった活動の水準が高まることを見出し，移行対象が母親の代理として時に母親の存在と同様の働きを有するのではないかと結論している。

しかし，Winnicott の強調点は，上述したような外的に現象面から捉えられる限りの移行対象の機能にあった訳ではない。もしそうであれば，従来から用いられている“愛着物”というタームで不足はないはずであり，取り立てて移行対象という術語を充てる必要などなかったはずである。Winnicott 理論の眼目を理解するためには，当然，何故“移行”なのかというところから説き起こさなくてはならないだろう。[7]

Winnicott は，他の精神分析家あるいは一部の発達心理学者と同様，乳児が，客観性と認知能力を獲得する以前の段階として，主観的あるいは概念的な世界に生きているという認識を有している。あるいは，彼はまた人間が一生を通じて内的主観的現実と外的客観的現実の双方に生きるという説にも賛意を呈する。が，彼の発想の妙は，そうした二分説を超えて，さらにその先，即ち三分説に進んでいるということである。彼は乳児の外的現実を受容する能力がない状態と成長してその能力が獲得される状態の間に，中間領域（intermediate area）というものを想定する。そして，この中間領域は，発達ライン上の一時点でのみ問題になるのではなく，人の一生を通じて残り，遊ぶことや，芸術，宗教等の文化的経験として人の健全な精神生活を支える重要な役割を持ち続けるとするのである。彼は，この中間領域（時に潜在空間とも呼ばれる）の意味を殊更強調するのだが，移行対象とは，まさにその発達的過渡期において，内的主観的世界と外的客観的世界の橋渡しをする，乳児が前者から後者へスムーズに“移行”することを促すものと把捉したのである。換言するならば移行対象とは，乳児が外的現実を漸次的に受容していくことを可能にする，発達的に不可欠の機能を担うものなのである。また，彼は，その“移行”を，自他が未分化で，母親を自己と切り離して，客観的に別個の存在として認知することができない関係様式，“一者関係”から，母親を自己と独立した存在と認知できる関係様式，“二者関係”への移行であるとも述べている。Tolpin (1971)[8]によれば，乳児は自己の身体的発達，認知能力，覚醒水準，活動性等の高まりとともに，早期の母親との共生関係，上記のタームで言えば“一者関係”から得ていた“安らぎ”をそのままの形では保持できなくなり，ある種の喪失体験をすることになるが，移行対象は，その段階において，かっての母子関係に付随していた安らぎの機能（触感，温み，匂い等）を代理的に果たし，子を静穏化するのに役立つのだという。おそらく，移行対象のこうした慰めの機能が，徐々に変化する関係様式に対する子の不安を防衛し，ゆっくりと新たな母親との関係（自己とは独立した存在としての母親との関係＝二者関係）さらには，それと並行して客観的な現実世界の受容を可能にしていくのだと考えられる。増大する喪失体験，不安に対して，あるいは新たな体験様式に対して，無防備で，何らそれに対処するメカニズムが備わっていなければ，乳児の精神発達は安らかな母子共生の一者関係の体験様式に固着し，次の段階への移行は困難あるいは歪曲したものになってしまうであろう。Winnicott 自身の言に従うならば，乳児は“思い通りにならない外的現実を被害的に経験し，考えることができないほどの不安に襲われ，自己崩壊の危機に瀕する”ということになるのかも知れない。

しかし，上記の説明では，まだ Winnicott の移行対象論を十分に述べ尽くしたことにはならない。その核心に迫るには，どうしてもその基底を成す，彼の“錯覚”(illusion) ―“脱錯覚”(disillusion) 論に言及しなくてはならない。“錯覚”とは，客観的には外的な対象である母親の乳房を，乳児が主観的に自己のもの，自己の思い通りになるもの（“魔術的統制”が可能なもの）と知覚する体験である。それは，早期，母親が乳児の欲求を直感的に察し，乳児が欲する，まさにその時に現実に授乳を施すという体験を基に生じてくる。それは，単に，乳児が完全に主観的に，現実の乳房の存在の有無に関わらず，幻想し，願望を充足するというフロイト的一次過程あるいは Winnicott 自身の言う“一次的創造性”とは異なり，実際に母親の乳房が差し出されなくては可能とならない。欲望を向けるその時に，外的な現実（乳房）に裏打ちされて，初めて，それを自己の願望のままに思い通りになるものと錯覚することが可能になるのである。だからこそ，それは外であって内でもあるという，まさに中間領域の体験に他ならないことになる。結局のところ，乳児の現実検討能力の高まり，さらには母親の側の自然な母性的関わりの漸減（“母親の養育に対する原初的没頭” maternal preoccupation からの離脱）に伴って，通常，乳児はこうした“錯覚”からの“脱錯覚”を経験することになる訳であるが，そのプロセスにおいて，次第次第に自己の欲求のままに現実に差し出されることがなくなる母親の乳房に代わって，代理的な満足対象として移行対象が重要な意味を有するようになるのである。ものとして移行対象は，実在の母親との関係とは異なり，いつも存在し，幼児の思いのままになる。幼児は，徐々に増大してくる思い通りにならない外的現実の圧迫の前に，匂い，暖かさ，感触等の具体的特性の上で，母親と

の連続性を持つ，ある対象を用いることで，それまで母親との間で経験していた“錯覚”を，結果的に自然な情緒発達，認知発達を何ら損なわない形で，反芻できるのである。自然な発達過程において不可避的に生じてくる欲求不満状況（例えば，離乳のプロセス）は，幼児側の主観からすれば，不快なものに違いないが，一方それは外的現実の受容，引いては自己の発達には不可欠の要素でもある。移行対象は，まさに前段階の体験様式を保持しながら（移行対象を用いて外的現実の一部を自らの欲求に合わせ，“錯覚”することが可能となるため，幼児の欲求不満は破滅的なものにならずにすむ），同時に次の段階への発達をも可能にする，過渡的な，しかし極めて重要な意味を有すると言えるのである。

しかし，移行対象を介した上記のようなプロセスは，純粋に乳幼児の側からのみ議論できるものではない。幼児の“錯覚”は，幼児自身の自然な成熟というよりは，あくまで母親側の幼児の欲求に応じた実際の授乳によって保証されるものなのである。従って，現実の乳房との間での“錯覚”を前提とする移行対象の体験様式も，当然，母親の実際の養育を抜きにしては語り得ないものということになる。[9]Winnicott は“ほぼよい”(good-enough) 母親の存在を基に，初めて移行対象経験が可能になるとしている。が，このほぼよい母親とは，最初のうちはほぼ完全に育児に没頭できる（乳児の欲求をほぼ完全に満たし得る）が，子の成長に伴って次第次第に育児だけでなく自分自身の関心を取り戻し始める（適度に欲求不満を子に与えることができる），言わばどこにでもいる，Winnicott 自身の言に依るならば，“普通の献身的な母親”（ordinary devoted mother）のことなのである。つまり，“中間領域”，“錯覚”といった幼児の独特の体験様式は，“ほぼよい”という，殆どの母子の間で可能になっている訳であり，理論的には，当然，移行対象経験も大半の子に見られる極めて一般的な現象ということになるのである。

II　移行対象研究のその後の展開

当初，子の無生物に対する愛着を幼児的フェティッシュの問題と関連付け，積極的にその病理性を強調する向きもあった[10][11]が，現在においては，Winnicott 的な見解が，ほぼ全面的に認められ，対象関係論における一つの常識とさえなっている感がある。この背後には無論，それを支持する極めて多くの臨床的あるいは実証的研究の積み重ねがあることは言うまでもない。Winnicott のオリジナルの発想は，多くの論者によって，推敲，あるいは単純化され，今では以下のような形で言及されることが多くなっている。即ち，移行対象は，ほぼよい母子関係を基に殆どの子どもが経験するものであり，むしろ，それが欠如している場合にこそ，母子関係の歪みと子の健常な情緒発達からの偏倚を読み取れることが多いというものである。近年，この趨勢を受けて，移行対象経験の有無を，健常な発達の一指標として，臨床場面，発達診断等で問題にする研究者も少なくはないようである。以下では，Winnicott 以後，どのような形でこうした見解が一般化し，また支えられてきたかについて簡単に概観しておこうと考える。

先ず，移行対象が大半の子に見られるということについてであるが，これは多くの実証的研究が提示した，実際の発現率によって，ほぼ支持されると見られてきた。移行対象が大きく問題にされ，数多くの研究がなされてきた欧米圏あるいはアングロサクソン圏のデータを吟味するに，英国79.0%(Setevenson；1954)[12]，スウェーデン74.8%(Ekekrantz 他；1972)[13]，米国67.5%(Busch；1973)[14]，米国60.0%（Passman；1979；ただし布類のみ）[15]，米国白人77.3%(Litt；1981)[16]，ニュージーランド都市部90.1%(Mahalski；1983)[4]など，いずれもかなり高率になっていることがわかる。井原(1986)[17]は，主に欧米圏の6つの研究結果を平均し，66%という発現率を算出している。さらに，Horton(1981)[18]など，発現率を問題にした研究の中には，実際には存在するはずの移行対象を見落としてしまっているケースも少なからずあり，現実にはもっと多くの子が持っている，つまり健常な発達過程にあれば殆どの子が経験するということを取り立てて強調する研究者もいる。移行対象を何とするかという同定基準にばらつきが認められない訳ではないのだが，確かに，欧米圏，アングロサクソン圏のデータを見る限り，“大半の子が有する”ということは積極的に否定できるものではない。

次に移行対象は健常な精神発達の指標と見なせるものであり，それが欠如している場合に何らかの障害あるいは発達遅滞等との連関が見出されることが多いという見解についても多数の研究結果によって支持が得られているようである。Stevenson (1954)[12]は，研究対象とした43例中33例の子に移行対象を認めたが，それが認められなかった子に過度の依存性向あるいは自立傾向が顕著であったと記述している。Horton 他 (1974)[19]は，性格障害者の84%が移行対象を経験していないと答えたのに対し，健常群の93%までが移行対象の経験を報告したと述べている。Arkerma(1981)[20]も性格障害の患者の幼児期における移行対象経験の割合が極めて低率であることを

報告している。また，Free 他(1985)[21]は，思春期の慢性精神疾患群の移行対象経験率が対照群に比して低い傾向にあることを，そして患者群の，母親による移行対象の取り上げられ体験の割合が有意に高いということを見出している。さらに Sherman 他（1983)[22]は，精神遅滞などの発達的，認知的障害を持った子の移行対象発現率がかなり低い（54人中５人）ことを，Radin（1968)[23]は，移行対象の経験を持たない子に，ごっこ遊びや見立て遊びのうまくできない子が多いということをそれぞれ示しているが，両者ともこうした知見の背後に創造力と象徴化能力の発達の遅れが関係しているのではないかと推論している。Gaddini（1977，79)[24][25]も小児心身症の子の移行対象発現率が低いことを見出し，それと象徴化能力の連関を重視している。また，Newson 他（1982)[26]は，移行対象経験者の方が未経験者に比して適応性が高いことを明らかにしているが，こうした流れに沿うものとして，移行対象経験者と未経験者の性格特徴の差異を明らかにした研究も存在する。[27][28]

さらに，移行対象が“ほぼよい”という割合良好な母子関係を基盤に生じるという見解を裏打ちするものとして，Provence 他(1961，62)[29][30]の研究が引かれることが多い。彼等は施設児を対象に調査を行い，毛布，シーツ，玩具等が周囲に豊富に存在していたにもかかわらず，それに特別の愛着を寄せる子は殆ど見られなかったと報告し，その理由として母性的関わりの不足を想定している。即ち，そこでは，通常の母子のような一対一の関係ができにくいため，幼児の中に，ある人間的対象の表象が確立せず，結果的に，それを基とする移行対象への愛着が困難になるというのである。彼等は，その裏返しとして，施設の特定の養母との間にパーソナルな関係を創り得た極少数の子に，移行対象が認められたということも述している。また，Mannoni(1982)[31]は，幼児が，移行対象を創造できなくなるのは，ある許容の閾を超えて，母親から引き離される時間が長くなる時であると述べ，子が移行対象を経験するのは，母親を内的表象として保ち得る程度に，母子関係が良好な場合であることを示唆している。

III　現代移行対象研究の矛盾と本研究の目的。

確かに，これまで見てきたように，Winnicott 的な見解[32]を支持する研究は多い。しかしながら，移行対象の意味について，疑念を表明する研究者が全く存在しない訳ではない。例えば，Bowlby（1969)[33]は，無生物に対する愛着が子にとって悪い前兆であるということは必ずしもないと述べながらも，“いわゆる移行対象が子どもの認知あるいは他の発達において特別な役割を演じていると仮定する根拠はない”と Winnicott の論に批判を向け，自らは，愛着物が単に母親の代理に過ぎないという意味で“代理対象”(substitute object）という語を採っている。Winnicott が，移行対象発現の基盤として良好な母子関係を想定し，“そこに母親が居て”はじめて移行対象は意味を有するとしたのに対し，Bowlby は，母親に対する愛着欲求が必ずしも良好に満たされない場合，“そこに母親が居ない”時に母親のまさに代理として愛着物は必要とされるに過ぎないと捉えたのである。

また，Winnicott に端を発する従来の見解からは，必ずしも整合的に説明され得ない複数の実証研究の結果が提示されてきているということも事実なのである。私達はそうした研究の多くを，特に移行対象発現率の文化間差を問題にした比較文化的調査の中に見出すことができる。Gaddini（1970)[34]は，ローマ在住のアングロサクソン人の移行対象発現率が61.5％であったのに対し，イタリア農村部の発現率が4.9％に過ぎなかったこと(ローマイタリア人，31.1％）を，Hong 他（1976)[35]は，米国人における発現率が54.0％であったのに対し，韓国人のそれが18.0％であったこと（米国在住の韓国人，34.0％）を，さらに Stanjek（1979)[36]は，ドイツにおける発現率が66.0％であったのに対し，インド南西部やアフリカのガボンにおいて移行対象が全く見出されなかったことを，それぞれ報告している。また，同じ米国内であるが，Litt（1981)[16]は，経済的に恵まれた白人集団と，社会経済的地位の低い黒人集団の間に移行対象発現率の差を見出している。(白人―77％，黒人―46％）(Mahalski；1985[37]は，要約して，都市型文化圏からはずれる，どちらかというと原初的な，また母子の身体的相互性がより密接な地域の移行対象発現率が低くなるとしている。)従来の一般的見解に従うならば，移行対象は殆どの子に見られる，ある程度の普遍性を備えた現象ということになるが，それならば，何故，社会集団によって発現率にこれほど大きな開きがあるというのだろうか。また，一般的な見解をそのまま適用し解釈すると，イタリア農村，韓国，南西インド，ガボンといった移行対象発現の極めて低率である文化においては，大半の子がほどよいとは言えない母子関係の中に生き，何らかの形で健常な情緒発達の基を揺るがされているケースが多いということになりかねない。日本内部における移行対象発現率は，藤井(1985)[38]によれば31.1％（広島，防府，N＝415)，遠藤（1988)[39]によれば38.0％(東京及びその近郊，栃木，山形，N＝951)と比較的低率であるが，一般的見解の方向に従うならば，

日本についても同様の解釈をある程度受け容れなくてはならなくなろう。しかし，これは常識的な見地から言ってあまりに不当なものと言わざるを得ない。無論，従来のWinnicott的見解を支持する研究者でも，上記のような解釈をそのまま受け容れるということはまずあり得ないであろう。しかし，従来の見解は，可能性として，こうした誤った解釈の余地を残しているということもまた事実なのである。おそらく従来の支配的見解は，適用可能性という点で，あるいは普遍的妥当性という点で不十分なものと見るべきではないだろうか。少なくとも，健常であれば，殆どの子が有するという移行対象を必然的な発達ライン上に位置付け，安易にその欠如を病的兆候と見る向きに対しては批判的な再検討が必要ではないかと考えられるのである。

これまで，多くの研究者は理論的な概観をしつつも，上述した状況を理論的枠組自体が抱える矛盾として捉えるということはなかった。[40]ただ，牛島(1982)[41]は，移行対象（牛島自身は過渡対象という訳語を充てている）に関する広範なレヴューの中で，上記のような状況にふれ，幼児早期の対象関係が希薄でも（例えばProvence等の知見），濃密でも（例えば比較文化的研究の知見）移行対象が現れにくいということを一見相矛盾する結果と把捉している。が，彼は，この問題を単なる対象関係の濃淡の次元で説明のつくものではないと述べながらも，何故ある子に現れ別の子に現れないのかという問いに答えるだけの材料は揃っていないとし，代案を提示するには至っていない。

本論は，上述したような現代移行対象研究の抱える矛盾を止揚すべく，企図されたものであると言って良い。ただ，その方向は，どちらかを採り，どちらかを捨てるというものではない。むしろ，Winnicott理論の根幹を保持しながら，従来のままでは整合的に説明され得なかった知見をも包括し得るような，新たな統合的枠組を仮説的に提示しようとするものである。が，筆者の企図は，純粋に学問レベルの興味からのみ発しているのではない。それには，もっと実際的，現実的な問題が絡んでいるのである。それは，移行対象の概念，あるいはWinnicottの論を，母親に説明しようとする際に，私達の裡に生じてくる当惑に根を持つものである。移行対象あるいは愛着物は日常一般に割合観察できるものであり，当の養育者たる母親の中にはただならぬ関心を示すものも少なくはない。特にそれは，子どもが愛着物を離せなくなるのではないかという母親の不安という形で現れることが多い。一般に流布している従来のWinnicott的見解は確かに，自分の子に移行対象を見出している母親に対しては安堵をもたらし得るものと言えよう。しかし一方で，それは，どうしても移行対象らしきものを想起できない母親にとっては，むしろ不安をもたらすものに転化する。先述した日本の発現率からすると，およそ三人に一人の了解は得られても，二人によっては受け容れられないのである。即ち，ここでも理論の普遍的妥当性が問題視され，私達はどうしても不満を抱かざるを得ないのである。筆者はWinnicottの論の根幹に対して，必ずしも全的に疑念を呈するものではないが，少なくともWinnicott理論には未整理の部分，日常的に外的に観察される現象を整合的，説得的に説明し得ない部分があり，そこに何らかの補足修正の必要が存することを指摘するものなのである。現在，Winnicottの翻訳が進み，概説書が出回るようになるにつれて，移行対象の概念は一般心理学のテキスト，あるいは育児書にさえも散見されるようになってきている。しかし，研究者が，日本の現実の状況についての知見を持たずに，Winnicottその他の言説を字義通りに，しかも極端に単純化して，読者に，そして母親にもたらすことを考えるに，そこに混乱が招来されることは想像に難くないのである。移行対象は日常一般に観察されるものだけに，その概念の当否は，純粋に学問的興味からだけでなく，より実際的な問題としても採り上げられて然るべきものと考えられるのである。

IV　移行対象の同定基準をめぐって。

さて，一つの仮説的モデルを問う前に，どうしても触れておかなくてはならない一つの問題が在る。それに対して予め防波堤を築いておかなくては，本研究の主張が，ある“誤解”，ある“無理解”から生まれているに過ぎないという批判を受けても仕方がないだろう。それは，本論が問題にしている矛盾というのは，発現率を算出している諸研究が，移行対象の同定基準を極めて狭く具体的なものに限定しているが故に生じているものであり，本来，移行対象をWinnicott的な広い同定基準に従って見ていけば，もはや矛盾ではなくなる可能性があるということである。

Winnicott自身のテクストに立ち帰るならば，彼は，移行対象の種類として，多様なる選択可能性を想定していた。彼は，毛布，タオル，ぬいぐるみといった具体的に手で触れ得る対象の他に，メロディー，子守歌，喃語あるいは幼児自身の身体運動といったものにも移行対象としての重要性を付与し，場合によっては，母親自身が移行対象であるとしか考えられないことも存すると述べている。[42]Horton (1981)[18]に至っては，Winnicottの移行

対象，移行現象の術語上の区別さえも混乱を招くとして両者を移行関係（transitional relatedness）という概念にとりまとめてしまうことを提唱し，要は，心理的発達ラインとして同様の意味を有することであるという立場から，対象として，具体的な物も触れ得ないものも，生きたものも無生のものも，あらゆるものを考えるべきだとしている。それに対して，Gaddini（1978）[43]は，極めて広義の同定基準を採った Ekecrantz 他（1972）の研究に対する批判の中で，移行対象の語が次第次第に多義的に用いられるようになってきている現状を指摘し，個々の移行対象を特定化することなく，移行対象，移行現象のタームにあらゆるものをとりまとめてしまっては，それを使用する幼児の対象関係を認識することが困難になってしまうであろうと述べている。Gaddini 他（1970）[34]は，幼児自身の母親の身体部位，あるいはおしゃぶりや哺乳びんは，幼児自身によって発見され創造されたものという移行対象の基本的要件を満たさないという視点から移行対象との別を指摘し，それらに対して移行対象先駆物（precursor object）の語を充てている。[44]また，Hong（1978）[45]は，移行対象の分類はあくまでも明確にしておくべきだとし，喃語や曲，身体的な運動，あるいは就寝時等に見られる儀式的な行動，それから母親自身などを移行対象相当物（transitional object equivalent）の中に含め，移行対象との別を考えている。この Hong の分類案からすると，実証的方向性を有する，移行対象の発現率を問題にした研究の多くが，この移行対象相当物を除外した，一次性移行対象（主に 1 歳前後までに現れる，毛布，タオル等の布類）と二次性移行対象（主に 2 歳以降に現れる，ぬいぐるみ等のお気に入りの玩具類）をもって移行対象の有無を判断してきたということになる。

今，仮に私達が，Winnicott 流の，あるいは Horton の移行対象解釈に従うならば，Hong や Gaddini あるいは Stanjek 等がプリミティヴな社会において移行対象を経験していないと判断した極めて多くの子どもが実は，何らかの目立たない移行対象，おそらくは Hong が提唱するところの移行対象相当物を有しているのかも知れないという解釈が可能性として生じてくる。即ち，従来の一般的な見解は，Winnicott，Horton 等の広義の定義をもって初めて意味を有するものであり，具体的な無生のものに限定した狭義の定義による移行対象の有無はそこには適用し得ないものであるということである。これは，一見確かにある程度，的を射た議論であるように思われる。

しかし，諸研究における移行対象の同定基準が一致したものではなかったということを考慮するだけで，問題の本質的な解決がもたらされるのであろうか。答えはどう考えても否であろう。先ず，第一に“明白な（manifest）対象”と“隠れた（covert）対象”（Horon[18]の術語による。前者が，具体的な有形の対象，後者が無形の対象を指す。）は，移行対象として機能的に同質なものであるとどれだけの確信をもって言い得るのかということである。確かに，Winnicott は，移行対象に多様なヴァリエーションを仮定はしているのだが，移行対象を乳児の最初の“自分でない”所有物とし，また，選択された対象の単に象徴的な側面のみならず，その対象が持つ現実性（actuality），現実的特性（形，色，触感など）も極めて重要であるとしている点等から考えると，彼自身，その理論化にあたり，明白な対象の全く認められない，隠れた対象だけの例をどれだけ念頭に置いていたかは甚だ疑問が持たれるところである。また，彼は母親自身が移行対象としか考えられない例があると述べながらも，それについて特別な理論的陳述を行ってはいない。（Gaddini，1978[43]は，移行対象はそもそも母親不在の状況で幼児自らが創造し発見するものであるという解釈を採り，母親自身を移行対象とする見方に対して疑念を表明している。）そうした例は，彼にとってあくまで特殊例であったのかも知れない。いずれにせよ，明白な対象と隠れた対象が移行対象として，同等の意味を有するのか，機能的に同一と言えるかは現在のところ，結論するには証があまりに不十分である。しかし，別を設けるにせよ設けないにせよ，それで議論が終結するわけでは全くないのである。問題の本質的な部分は，むしろ，こうした移行対象の具体的定義以外のところに存在すると筆者は主張するものなのである。

即ち，たとえ Horton などの広義の移行対象の定義を採ったとしても，何故，ある社会文化の中では，明白な移行対象の発現率が低く，ある社会では，それが極めて高率になるのかということは不問に付されたままなのである。確かに，Horton 流に，個々の対象の種類を問わなければ，殆どの子どもが移行対象を経験しているという可能性を容易に退けることはできない。しかし，今仮に，Horton や Winnicott のように殆どの子どもが移行対象を経験するという立場でものを言うにしても，ある子は明白な対象で，ある子は隠れた対象であるという事実，ある文化の中では明白な対象が選択されやすく別の文化の中では選択されにくい（隠れた対象が選択されやすい）という厳然たる事実を眼前にして，理論が殆ど説明力を持たないというのであれば，私達は，ここからどれだけ移行対象の普遍的な意味を読めるというのであろうか。

実は，先に示した現代移行対象研究において矛盾とされ，問題とされているものは，元を辿ればWinnicott以来の，こうした移行対象発現のメカニズムに関するモデルの不在に端を発するのではないかと筆者は考えるのである。

V　本研究が提示する仮説的モデル。

従来の一般的見解においては，移行対象の有無を分ける要因に関する議論が極めて希薄であるが，もしそれを特定するとすれば，幼児早期に子がどれだけ“ほどよい”母子関係を享受し得たかということになるだろう。しかし，これまでの実証的な知見を総括すると，移行対象は，牛島の指摘のように，母子関係が希薄である場合と同様，濃密である場合にも発現しにくいということが言えた。先ず，ここで問題になるのは，母子関係が濃密である場合を“ほどよい”とは言えない母子関係と一義的に考えることができるかということである。さらに，それを子の精神発達の歪みに密接に連関するものと把握してよいかということである。“ほどよい”母親というのは，先述した通り，ごく普通のどこにでもいるような母親である訳であり，そうした意味で，ある文化，ある社会の大半を占めるような，身体的相互性の相対的に密接な養育形態が“ほどよい”という範疇からはずれるというのは受け容れ難い。まして，それが何らかの精神病理との関連を有するとなると，これはどうしても否定せざるを得なくなる。

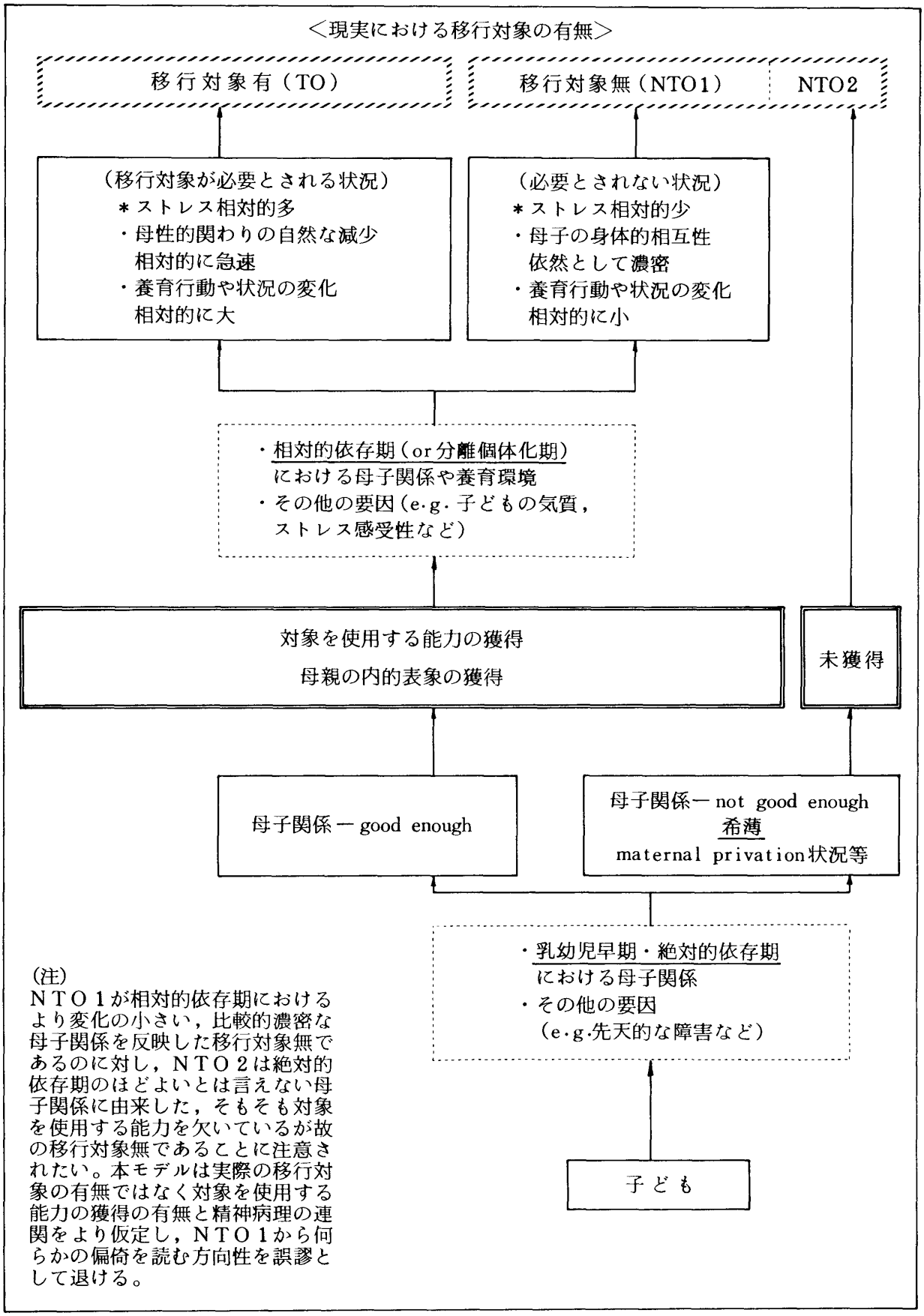
筆者は，ほどよい母子関係が現実の明白な移行対象の発現に密接な連関を有するということを否定しない。しかし，それを直接的な規定要因とは捉えない。つまり，筆者の発想は，移行対象を単に幼児早期の対象関係の濃淡，そしてその結果としての移行対象の有無という単一の次元からのみ捉えようとする従来の見方に対して疑念を表明するものである。筆者は移行対象の普遍的意味を読もうとするのであれば，不可避的に二次元的な見方が必要になってくるのではないかと考える。幼児早期の対象関係と現実の移行対象の発現を直線的に結ぶのではなく，その間にもう一次元，媒介的な要素を仮定し，それがむしろ実際の移行対象の有無を分ける規定要因となっているのではないかと捉えるのである。

ここで，モデルの大枠を示す前に，Winnicottの“対象を使用する能力”(a capacity to use objects) という概念に触れておかなくてはならない。何故なら，これが本モデルの，一つの鍵概念となるからである。筆者の発想の眼目は，この対象を使用する能力の獲得の有無と現実の移行対象発現の有無を峻別するところにある。ここで再びWinnicott自身のテクストに帰って然るべきであろう。彼は，「遊ぶことと現実」*Playing and Reality* (1971)[1]の序論の中で次の様に述べている。“この研究で私が扱っていこうとしているのが，赤ん坊の使用する布切れやテディ・ベアについてではないことは今では一般に認められていると思う。つまり，使用される対象についてでなく，むしろ対象の使用について述べようとしているのである。”彼の理論化は，実は，種類は何であれ，とにかく子どもが，何らかの対象を創造し，発見し，それを通じて主観的なものと客観的に知覚されるものとの間に“中間領域”を経験することの重要性，そして移行対象を使用する内的なプロセスを強調するためになされたものなのである。“対象を使用すること”というのは，それ以前の“対象と関係すること”から一歩発展したものとされる。後者が，母子未分化な状態にあって幼児があくまで主観的な対象と関わることであるのに対し，前者は，自己とは独立した母親の存在，さらに外的客観的現実の認識がある程度可能になり，もはや自己の外側にある対象を認めつつも，それに欲望や怒りを付託，自己の思い通りに使用することである。これはまさに，前半部分で語った「錯覚」—「脱錯覚」プロセスに符合するものである。

Winnicottは，この対象を使用する能力の発達を，生得的なものでも，純粋に個人内で可能になるものでもなく，あくまで“発達促進環境”，現実の母親との関係に依拠するものだとしている。即ち，ほどよい母子関係を基に可能になるものとしている。問題は，その能力の獲得が即，現実の移行対象の使用を意味するかということである。これまでは，暗黙裡にその図式が当然視されてきたと考えられる。が，本研究が提示する仮説はそれを否とし，対象を使用する能力と実際の移行対象発現との間に，“現実に移行対象が必要とされる状況”という環境側の要因を仮定するのである。対象を使用する能力はあくまで潜在的なものであり，それは，ある状況に接して，初めて具体的なもの，明白な移行対象を介しての具現ということになると主張するのである。

ここで，本研究が移行対象の発現メカニズムとして提唱するところを，図として示しておこう。(図1)このモデルに従えば，母子関係が希薄でも濃密でも移行対象は発現しにくいということがそれほどの矛盾もなく納得できるものとなる。筆者が考えるに，前者はより早期の，絶対的依存期にある段階での，ほどよいとは言えない(希薄な) 母子関係に由来した，そもそも対象を使用する能力を発達させることができなかったが故の移行対象無で

図 1.　本研究が提示する仮説的モデル



（注）
ＮＴＯ１が相対的依存期におけるより変化の小さい，比較的濃密な母子関係を反映した移行対象無であるのに対し，ＮＴＯ２は絶対的依存期のほどよいとは言えない母子関係に由来した，そもそも対象を使用する能力を欠いているが故の移行対象無であることに注意されたい。本モデルは実際の移行対象の有無ではなく対象を使用する能力の獲得の有無と精神病理の連関をより仮定し，ＮＴＯ１から何らかの偏倚を読む方向性を誤謬として退ける。

ある。一方，後者は，早期，ほどよい母子関係に支えられ，対象を使用する能力を発達させているが，相対的依存期以降，母子関係の質の変化が相対的に小さく，依然“濃密”であるが故に（現実に移行対象が必要とされる状況にないが故に）結果的に移行対象への愛着が見られなかったのである。移行対象経験無という現象面での一致は，両者に同一の機序が存在することをいささかも意味しない。また，これまでは，牛島の言“幼児早期の対象関係が希薄でも濃密でも，過渡対象は現れ難い”に代表されるように，母子関係の質が問題になる時期を広く同一の幼児早期としてきたが，筆者は絶対的依存期と相対的依存期に別個の重要性を付し，より精緻に移行対象との連関を見ることを提唱する。つまり，絶対的依存期における母子関係のあり方を対象を使用する能力の獲得を準備するものとして，相対的依存期以降の母子関係のあり方を実際の移行対象の有無を分けるものとして見るのである。

さて，移行対象の欠如が何らかの精神発達の歪みと連関を有するということについては，本研究のモデルからどのように説明されるのだろうか。これは，対象を使用する能力の基盤を作り上げるはずの，絶対的依存期における母子のあり方を考えてみることによってある程度は理解できる。Winnicott は母性的養育の剝奪（maternal deprivation）とは別に，母性愛欠損（maternal privation）という概念に触れている。それは文字通り，最初あったものが剝奪されるのではなく，もともと欠損している，端から与えられない状況，厳密に言えば絶対的依存期における環境としての母親からの働きかけの失敗を意味する。そして彼は，deprivation 状況以上に，この privation 状況と重篤な精神障害との連関を想定しているのである。これからすると，モデルの中で対象を使用する能力の発達を抑止すると考えた，より早期の母子関係の歪み，不足自体が，何か精神病理の素因を形成していると考えてもそれほど認容し難いことではなくなる。対象を使用する能力の欠損自体が，既にそのことを如実に物語っている。筆者は，ものとしての特定の移行対象と現実に関わるプロセス自体が，普遍的な意味で，実際に情緒発達に不可欠かどうかについては疑問を有している。何故ならば，移行対象との関わりを持たない，少なくとも明白な対象との関わりを実際に経験しない子が，決して少数例ではなく，文化によってはむしろより一般的な存在だからである。普遍的な発達促進要因として重要なのは，具体的な経験の方ではなく，それを状況に応じて可能にする，潜在的な，対象を使用する能力の方ではないのだろうか。本研究のモデルに従えば，精神発達の歪みを具体的な移行対象の使用そして相対的依存期以降の母子関係ではなく，“対象を使用する能力”，さらにそれを準備するより早期の，絶対的依存期の母子関係に密接に結び付けて考えることによって，ある文化圏の大半の子が何らかの健常な情緒発達のラインからはずれているという明らかに不当な誤った解釈可能性を棄却することができる。

移行対象が，Winnicott その他の論者が主張するように，乳房あるいは母親自身を象徴的に代理するものであるならば，その前提として，代理されるものとしての母親の表象が子の中に確固としたものでなくてはならないはずである。筆者が考えるに，絶対的依存期におけるほどよい母子関係というのは，子の中に豊かなしかも安定した母親というものの表象を準備する程度に適切な関係のことなのだろう。対象を使用する能力は，母親を自己とは独立した客観的存在，外的現実として認識することを前提にするとされるが，そうだとすると，対象を使用する能力が獲得されない状況とは，そもそも母親の内的表象が子の中に育たない状況をも包含する。その状況とは，幼児側からすれば，対象と関係することが確保されない，母親側からすれば，抱っこ，あやし，対象を差し出すことといった基本的な養育機能を果たし得ない状況である。先にもふれたように Mannoni は，幼児が移行対象を創造できなくなるのは，ある許容の閾を超えて幼児が母親を内的表象として保てない場合であると述べていた。また，Winnicott 自身，“幼児が移行対象を用いることができるのは内的対象が生き生きとして，そしてほどよい時である。しかし，この内的対象はその質を外的対象の存在，生命力そして動きに左右されている”と言っている。前述した maternal privation とは，まさに母親の内的表象そのものが十分に準備されない状況でもある訳で，その意味で，重篤な精神病理との関連を指摘されることも無理のないことなのかも知れない。Gaddini[43] は，本来移行対象は，幼児が表象可能なものとして選択した，母親のいずれかの諸側面，あるいは幼児自身が自己の身体感覚を通じて（母親との関係の中で）経験する諸側面から構成されるとする。そして，彼女は，誕生した季節が具体的対象の選択，素材の選択に関わること（母親が身に付けるウール，綿等の素材が，母子接触の中で子に感受され，子がそれと同じものを対象として選択する傾向が高まる）を見出したが，この事実は，移行対象に，早期の感覚的記憶を伴った母親の表象が反映されるということの証左であろう。また，Escalona（1963）[46]，Bettelheim（1969）[47]，Ruhde 他（1974）[48] も，愛着が他の物，対象に拡がる以前に，特定の対象，母親に対する強い愛着ができていなくてはならず，両者の間には感覚

的モダリティー上の連続性があるという意味のことを述べている。Provence 他が報告した施設児の場合，特定の愛着対象ができず，内的表象そのものが準備されなかったために，移行対象への愛着が殆ど見出されなかったのかも知れない。そもそも代理されるべきものがなければ，象徴的代理としての移行対象は全く意味を持たない訳である。

移行対象が，母親についての表象を前提とするということはもはや疑うべくもない。が，本論の立場から言えば，より正確には，母親の豊かな内的表象が準備されていれば，子は時に状況に応じて，適応の術[49]として移行対象を使用し得ると換言されて然るべきである。度々主張してきたように，ほどよい母子関係が約束されてさえいれば，必然的にどの子も移行対象を用いるとは言えないからである。ここで，“移行対象が現実に必要とされる状況”について詳述しなければならなくなる。従来は，Horton[18]の言“ぬいぐるみあるいは毛布への愛着は，母親への愛着の‘あふれ’a spill-over から結果する”に示されるように，必然的に自然に，母親の表象，母親への愛着が，無生の対象に及ぶとされてきた。しかし，筆者は，あふれを問題にするのであれば，本来，内容ばかりでなく容器を問題にしなければならないと考える。この場合の容器は，子の愛着を満たす側の母親の具体的な関わり，特に子が自立に向かい始める相対的依存期におけるそれである。(Mahler；1975[50]，Bergman；1978[51]は，移行対象を，生後5，6ケ月頃から始まる分離個体化期において重要な役割を持つものとしているが，遠藤；1988[39]は，実際に移行対象が，この時期に集中して発現しやすいことを実証している。)筆者は，内容物たる，幼児の母親に対する心的表象や愛着が，自然に湧き出，結果的にあふれるという従来通りのイメージを有さない。むしろ，それは，ある段階で一定に達し，本来ならば，容器との間で微妙な均衡を保つのであり，こぼれて無生の対象に及ぶのは，その容器たる母親の具体的な関わりに何らかの揺動，変化が生じた時と把捉するのである。(自然に湧き出あふれるのではなく，揺れてこぼれる。)牛島が，対象関係が濃密である時移行対象は現れ難いとしたケースは，相対的依存期以降も母子関係の量と質に変化が相対的に少なく，依然濃密であるが故に，容器との微妙な均衡が保たれ，結果的に内容がこぼれなかった場合である。

Hong 他 (1976)[35]は移行対象発現率の文化間差を問題にした比較文化的研究を総括して，就眠様式，授乳様式，身体接触というような要因の介在を示唆している。また，遠藤(1988)[39]は，日本国内の移行対象有群と無群の直接比較から，子の欲求に応じた母乳哺育で，しかもそれが安定して長期に及び，母親による添い寝が長期に渡って持続される時，また母性的関わりの質と量が相対的に安定している時，さらに子自身の気質としてのストレス感受性がそれほど強くない時に，移行対象への愛着が見出されにくくなることを実証的に明らかにしている。遠藤は，この結果を受けて，分離個体化期における，子を取り巻く環境，特に母親が与えるストレスの相対的多少が，実際の移行対象発現の有無を分けているのではないかと考察している。“移行対象が現実に必要とされる状況”とは，相対的依存期以後の，Mahler の術語を借りれば，分離個体化期における，子自身にとってのストレスが相対的に大きい状況なのである。このストレスの相対的多少とは，個々の母親の関わり方によって規定されるとともに，各文化が有する養育のスタイルにも当然のことながら左右される。文化社会によって，あれほどの発現率の開きがあったのは，まさにこのことを反映したものと考えるのが適当であろう。

VI　結　　論

おそらく，Winnicott が移行対象という概念に付託した意味はかなりのところ妥当であろう。ただし，その理論は，移行対象のオリジンの問題に関して言えば不十分であった。それは，彼自身の強調点が実際には，移行対象という外的に観察し得る現象そのものというよりはむしろ，それからスペキュレートできる“対象の使用”という内的なプロセスにあったからであり，また彼の研究土壌であるアングロサクソン圏においては，対象を使用する能力を獲得した子が現実にも移行対象を経験する確率が相対的に高く，健常な枠内で，ある子が持ちある子が持たないのは何故かという問い自体がそれほどの意味を有さなかったからかも知れない。これは Caudill 他 (1973)[52]が指摘するように，欧米の養育スタイルが相対的に距離を置いた，早期から子の自立を促す傾向が強く，しかも母子別床寝が一般的であるという状況を考えれば納得できる。それは，筆者の視点から言えば，現実に移行対象が必要とされる状況，分離個体化期における子にとってストレスフルな状況とより密接に結び付きやすいためである。そうした社会では，健常な発達過程にある大半の子が現実に移行対象を経験しやすい分，その欠如を，ほぼよいとは言えない母子関係と何らかの精神発達の歪みに結び付けて考えることも，あながち妥当性の低いことではなかったのかも知れない。[53]が，それは Winnicott，その他の学者が強調するようには必ずしも普遍的なものではなかったのである。母乳哺育，母子同

床寝が一般的で，身体的相互性がより密接な文化社会においては，その考えはむしろ混乱を招来するものに転化するのである。[54]おそらく，こうした文化においては，現実の移行対象からほぼよい母子関係と健常な情緒発達を読む方向性はある程度妥当なものと言えても，その逆は，即ちほぼよい母子関係と健常な精神発達から必然的に現実の移行対象の発現を仮定すること，さらに，その欠如に病的兆候を読み取ることは真でないのである。本論の立場から言えば，必要十分条件が成り立つのは，あくまで，現実の移行対象発現との間でではなく，対象を使用する能力との間においてなのである。筆者の発想の中心は，潜在的な，対象を使用する能力の獲得の有無と現実の移行対象発現の有無に明確な別を設けるところにある。

Winnicott は，母乳栄養の方が，人工栄養に比して，布の切れ端や柔らかいおもちゃとの関係をより結びやすくさせると述べている。[55]しかし，比較文化的研究あるいは奥平(1973)[56]，遠藤(1988)[39]の研究など実証研究の多くは，むしろ，母乳栄養が現実の移行対象発現とは結び付きにくいということを示していた。[57]が，だからと言って，Winnicott の論が即座に全的に否定されるというものでもない。彼の論は譲歩付きで生き残る。それはおそらく母親の表象を確固としたものにし，さらには母親の象徴として対象を使用する能力を発達させやすいという意味では，かなりのところ妥当なものなのである。潜在的には，移行対象を創造し，状況に応じて，それを使用し得る能力，その素地は，彼の指摘通り，早期からの母乳哺育を通じた密接な母子関係によってより作られやすいのかも知れない。が，そこに一つの逆説が，存在していたのである。Winnicott は，この母乳哺育の状況，密接な身体的相互性が，相対的依存期あるいは分離個体化期以後も安定して保たれる場合に生じる事態を考慮し，理論の中に包摂することはなかった。本来，緊張調節，適応の術としての機能を有する移行対象は，調節すべき緊張，適応すべきストレスフルな事態が相対的に少なくなれば，それに伴い必要とされなくなるのである。彼は，ほどよい母親の機能として，早期にほぼ完全に幼児の欲求に適応することとともに，その母性的関わりを徐々に減らしていくことを挙げていた。しかし，特に後者の機能に関しては，個人そして養育文化によって相当の開きが存在すると思われる。そして，その減少の度合いが緩やかなものになればなるほど，移行対象が必要とされなくなる可能性は高まるのである。その意味で Mahalski[37]が，precondition として，特定の人との暖かい関係を享受した後で，その接触状況が子にとって不十分なものに転化した時に移行対象は発現すると言っていることは正しい。ただ，それは，どの子にもある必然的過程ではない。本研究が問題にしてきた矛盾とは，実は，Winnicott その他が，理論化の際依拠した文化が，総じて相対的に子にとってストレスフルな（母性的関わりの普通の意味での減少が比較的急速な）養育文化であり，結果的に大半の子が移行対象を必要とするが故に，誤って移行対象を必然的発達ライン上に位置付けてしまったところにあるのかも知れない。[58]

今後の課題は，全く具体的なものとしての移行対象を介さずに，Winnicott が言う“錯覚”—“脱錯覚”のプロセスがそもそも可能なのか，もし可能だとすれば，それは如何な形でなのか，従来の移行対象の存在を暗黙裡に仮定したものと全く同様の定式化ができるのかなどの問題を，理論的に臨床的に明らかにしていくことだと言えよう。これまで述べてきた通り，移行対象についての一般的な見解には，特に日本などの現状とは整合しないところがあり，安易な応用はできないことがわかるだろう。臨床場面，発達診断等で移行対象を問題にするとしても，単にその現実の発現の有無だけではなく，その子の移行対象に関するあらゆる情報を精緻に検討することが望まれる。移行対象についての研究はやや理論が先行し過ぎたのかも知れない。これからは，もう一度，それを母と子の間に戻し，じっくりと観察していくべきなのかも知れない。

（指導教官　井上健治教授）

注と参考文献

1) Winnicott, D. W. (1971) Playing and Reality「遊ぶことと現実」橋本　雅雄訳　岩崎学術出版 (1979)
2) Korner, A. F., and Thoman, E. B. (1972) The relative efficacy of contact and vestibular-proprioceptive stimulation in soothing neonates. Child Development 43：433-453
3) Gay, E. L. and Hyson, M. C. (1976) Blankets, Bears, and Bunnies : Studies of Children's Contacts with Treasured Objects. Psychoanalysis and Contemporay Science, Vol. V ： 271-316
4) Mahalski, P. A. (1983) The Incidence of Attachment Objects and Oral Habits at Bedtime in Two Longitudinal Samples of Children Aged 1.5-7 years. J. Child. Psychol. Psychiat. 24(2)：283-295
5) Passman, R. H. and Weisberg, P.(1975) Mothers and Blankets as Agents for Promoting Play and Exploration by Young Children in Novel Environment. Developm. Psycol. 11：170-177
6) Passman, R. H. and Adams, R. E. (1981) Preferences for mothers and security blankets and their effectiveness as reinforcers for young children's behaviors. J. Child. Psychol. Psychiat. 23(3)：223-236
7) Winnicott 理論の解釈に関しては次の書を参考にした。
・Guntrip, H. J. S. (1971)「対象関係論の展開」 小此木・柏

瀬訳 誠信書房 (1981)
・Walbridge, D. and Davis, M. (1981) Boundary and Space「情緒発達の境界と空間」—ウィニコット理論入門—猪股監訳 星和書店 (1984)
・Winnicott「子どもと家庭」 牛島監訳 誠信書房 (1984)
・Winnicott「情緒発達の精神分析理論」 牛島訳 岩崎学術出版 (1977)
・北山 修 「錯覚と脱錯覚」 岩崎学術出版 (1985)
・Brody, S. (1980) Transitional objects : Idealization of a phenomenon.
Psychoanalytic Quarterly 49 : 561-605
・Gaddini, R. (1975) The concept of transitional object. Journal of the American Academy of Child Psychiatry 14 : 731-736

8) Tolpin, M. (1971) On the beginnings of a cohesive self. Psychoanal. Study Child 26 : 316-352
9) Winnicott が他の対象関係論者，例えば Klein 等と徹底的に異なるのは，幼児の内的主観的世界のみならず，具体的な母親，環境側の関わりを強調し，理論の中に包摂したことである。
10) Wulff, M. (1946) Fetishism and Object Choice in Early Childhood.
Psychoanl. Quart., 14 : 450-471
11) Sperling, M. (1963) Fetishism in Children. Psychoanal. Quart. 32 : 374-392
12) Stevenson, O. (1954) The first treasured possession. Psychoanal. Study Child 9 : 199-217
13) Ekecrantz, L. and Rudhe, L. (1972) Transitional Phenomena : forms and functions of special loved objects. Acta psychiat. scand. 48 : 261-273
14) Busch, F., Nagera, H., Mcknight, J., and Pezzarossi, G. (1973) Primary transitional objects. Journal of the American Academy of Child Psychiatry 12 : 193-214
15) Passman, R. H. and Halonen, J. S. (1979) A developmental survey of young children's attachments to inanimate objects. J. Gen. Psychol. 134 : 165-178
16) Litt, C. J. (1981) Children's attachment to transitional objects : a study of two pediatric populations. Amer. J. Orthopsychiat. 51 : 131-139
17) 井原成男・木村涼子 (1986) 移行対象の発達的意味—移行対象の様々な現れ方をした 3 症例からの検討 小児精神と神経 Vol. 26(1) : 57-63
18) Horton, P. C. (1981) Solace : The Missing Dimension in Psychiatry.
「移行対象の理論と臨床」—ぬいぐるみから大洋体験へ—児玉憲典訳 金剛出版 (1985)
19) Horton, P. C., Louy, J. C., and Coppolillo, H. P. (1974) Personality Disorder and Transitional Relatedness. Arch. Gen. Psychiatry 30 : 618-622
20) Arkema, P. (1981) The borderline personality and transitional relatedness.
American Journal of Psychiatry 138(2) : 172-177
21) Free, K. and Goodrich, W. (1985) Transitional Object Attachment in Normal and in Chronically Disturbed Adolescents. Child Psychiatry and Human Development 16 (1) : 30-44
22) Sherman, M. and Hertzig, M. E. (1983) Treasured Object Use — A Cognitive and Developmental Marker. J. Amer. Acad. Child Psychiat. 22 : 541-544
23) Radin, N. (1968) Some impediments to the education of disadvantaged children. Children 15 : 171-176
24) Gaddini, R. (1977) The psychology of the self as a basis of psychosomatic disorders. Psychother. Psychosom. 28 : 260-271
25) Gaddini, R. (1979) Early psychosomatic pathology. Psychother. Psychosom. 31 : 121-127
26) Newson, J., Newson, E., and Mahalski, P. A. (1982) Persistent Infant Comfort Habits and Their Sequelae at 11 and 16 Years. J. Child Psychol. Psychiat. 23(4) : 421-436
27) Cohen, K. N. and Clark, J. A. (1984) Transitional Object Attachment in Early Childhood and Personality Characteristics in Later Life.
Journal of Personality and Social Psychology. 46(1) : 106-111
28) Lundy, A. and Potts, T. (1987) Recollection of a transitional object and needs for intimacy and affiliation in adolescents. Psychological Reports. 60 : 767-773
29) Provence, S. and Ritvo, S. (1961) Effects of deprivation on institutionalized infants: disturbances in development of relationships to inanimate objects.
Psychoanlytic Study of the Child 16 : 189-204
30) Provence, S. and Lipton, R. C. (1962) Infants in institutions.
New York : International Universities Press.
31) Maud Mannoni (1982) D'un impossible à l'autre.
「母と子の精神分析」 松本・山口・西田訳 人文書院 (1984)
32) "Winnicott の" ではなく "的" とあえて言うのは，現在の一般的見解が全的に Winnicott 自身の言に依っているというよりも，その基本ラインに沿って，その後の多くの研究者が固めてきたものという方が正鵠を射ているからである。
33) Bowlby, J. (1969) Attachment and Loss, vol. 1. New York : Basic Books, 309-313
「母子関係の理論 I 愛着行動」黒田実郎他訳 岩崎学術出版 (1976) 364-369
34) Gaddini, R. (1970) Transitional Objects and the Process of Individuation.
J. Amer. Acad. Child. Psychiat. 9 : 347-365
35) Hong, K. M. and Townes, B. D. (1976) Infant's attachment to inanimate objects.
J. Amer Acad. Child. Psychiat. 15 : 49-61
36) Stanjek, k. (1979) Children's mental attachments to material objects. Paper presented at the international Congress of Psychology of the Child, Paris
37) Mahalski, P. A., Silva, P. A., and Spears, G. F. S. (1985) Children's Attachment to Soft Objects at Bedtime, Child Rearing, and Child Development.
J. Amer. Acad. Child Psychiat. 24 : 442-446
38) 藤井京子(1985) 移行対象の使用に関する発達的研究 教育心理学研究33 : 106-114
39) 遠藤利彦 (1988) 移行対象と maternal attachment—移行対象の発生因的解明—
東京大学大学院教育学研究科1987年度修士論文
40) その理由として，一つに，これまでの移行対象の問題のされ方が主にそれが有する機能に力点を置いたものであり，殆どの子が有するという暗黙の前提の前に，そもそも何故ある子が持ち，ある子が持たないかというオリジンに関する問い自体が不要なもの，意味を持たないものとされてきた経緯を考えることができる。
41) 牛島定信 (1982) 過渡対象をめぐって 精神分析研究26(1)
(現代のエスプリ220〈至文堂1985〉所収)
42) 一般的には，例えば Horton の言うように Winnicott が，ぬいぐるみのような具体的な物に対して移行対象のタームを充て，歌，曲のような無形の触れ得ないものに移行現象のタームを充

てているとされているが，筆者のテクスト理解からすると，それは必ずしも当を得たものでないように思われる。確かに，Winnicott の述懐は多義的であいまいでそう読めないこともないのだが，彼は，移行現象のタームを，幼児が行動，心的プロセスを含め，移行対象と関係すること，そのものに充てていると考えられるのである。高橋哲郎（1989）も移行現象を移行対象をめぐる現象としている。(「子どもの心と精神病理」；岩崎学術）従って，ここでは，話をわかりやすくする意味もあり，とりあえずは，有形であれ無形であれ，幼児が関わる対象を問題にするということで，専ら移行対象の語を用い，あえて移行現象を一般的な捉え方で採り上げ論じることはしない。

43) Gaddini, R. (1978) Transitional Object Origins and the Psychosomatic Sympom.
In : Between Reality and Fantasy—Transitional Objects and Phenomena—.
Edited by Grolnick, S., Barkin, L. and Muensterberger, W. New York : Jason Aronson. 109-131 (chapter8)

44) Winnicott 自身，おしゃぶり，哺乳びん等を移行対象とは考えていなかったようである。それに対し，Fink (1962)，Spock (1963)，Newson 他 (1963) はそうしたものにも移行対象としての意味があるのではないかという見解を表明している。

45) Hong, K. M. (1978) The Transitional Phenomena: A Theoretical Integration.
The Psychoanalytic Study of the Child 33：47-79

46) Escalona, R. W. (1963) Patterns of infantile experience and the developmental process. Psychoanalytic Study of the Child 18：197-244

47) Bettelheim, B. (1969) The Children of the Dream.
Great Britain : Thames & Hudson Ltd.

48) Rudhe, L. and Ekecrantz, L. (1974) Transitional Phenomena: the typical phenomenon and its development. Acta psychiat. scand. 50：381-400

49) Hong[45]も移行対象を適応という観点から考察している。

50) Mahler, M., Pine. F., and Bergman, A. (1975) The Psychological Birth of the Human Infant. 「乳幼児の心理的誕生—母子共生と個体化」高橋・織田・浜畑訳，黎明書房 (1981)

51) Bergman, A. (1978) From Mother to the World Outside : The Use of Space During the Separation—Individuation Phase. In : Between Reality and Fantasy—Transitional Objects and Phenomena—. Edited by Grolnick, S., Barkin, L. and Muensterberger, W. New York : Jason Aronson. 145-165 (chapter10)

52) Caudill, W. A. and Schooler, C. (1973) Child behavior and child rearing in Japan and the United States. J. Nerv. Ment. Dis. 157：323-338

53) 何故そう言えるかというと，絶対的依存期にほどよいとは言えない母子関係の中で対象を使用する能力を獲得できなかった（精神病理との関連性相対的に大）子の，現実に移行対象を持たない子ども全体の中に占める割合が相対的に大きくなるからである。

54) 就眠様式一つを考えても養育スタイルに大きな差異が存在することがわかる。Litt[16]によれば米国の白人中上層家庭における同床寝の割合は一歳以前に既に0％であるが，遠藤[39]が明らかにした日本の現状では二歳段階でも全くの一人寝をしているという子は17.6％に過ぎない。

55) Winnicott, D. W. (1964) The Child, the Family, and the Outside Worlds.
Part One : Mother and Infant. (Penguin books)「子どもと家族とまわりの世界（上）赤ちゃんはなぜなくの—ウィニコット博士の育児講義—　猪股訳　星和書店 (1985)

56) 奥平洋子(1973)　母親の養育行動とパーソナリティー発達　山下俊郎古稀記念論文集—子ども—：62-85　玉川大学出版部

57) Gaddini[34], Hong,[35], Stanjek[36]等の比較的文化的研究及び，日本国内における奥平[Z56]遠藤[39]の研究が，母乳栄養と移行対象の発現の間に負の相関を見出しているのに対し，Boniface 他 (1979)，Brody 他(1978)，Van der Veer 他(1981)，Mahalski 他[37]など，主に欧米圏内で行われた研究の殆どが，授乳様式始め具体的な母性行動や養育形態といった要因の介在に否定的な結果を提示していることは極めて興味深い。筆者はこうした対照的な結果の背後に，特に就眠様式の文化的差異が関与していると考える。欧米圏等，母子別床寝が極めて一般的な社会においては，それが強く，殆どの子にとってのストレス因となっているが故に，かえって養育形態の諸要因の介在が取り出せなくなっているのではないだろうか。こうした欧米圏の研究結果が移行対象のオリジンの相対的軽視に影響を及ぼしたという見方もできなくはない。

58) Bowlby[33]と Winnicott の対立点について触れておくとすれば，Winnicott の強調点が，対象を使用する能力を準備し，母親の内的表象を確固としたものにする，早期の絶対的依存期における母子のほど良い関係にあったのに対し，Bowlby が問題にした母子関係は，分離個体化期以後の，現実に移行対象が必要とされる，子の欲求が十分に満たされなくなる状況だったのである。このことが意識され，本研究が提示したモデルに従えば，両者とも移行対象のある本質に触れていると言うことができ，ただ強調点にずれがあっただけで，本来，根本的な対立とすべきものではなかったということがわかる。